

創造と

表現の

病理

文学における
狂気

春原千秋

太宰治

治はその分裂性、

自己不確実性、顕示性性格のために

青年期の危機的状況を平穩のうちに

乗り越えることができなかった。

彼は文筆生活に己の青春を賭けながらも

酒に浸り、睡眠剤を飲み、女性遍歴を

重ねるといった無頼の生活を送った。

デカダンスと道化は、彼にとっては

生きがための必死の努力であり

それに耐えられなくなる

自殺を企てたのである。

太宰治が現代の若者たちに、

変わらざる人気を持ち続ける理由は何か。

介山が「大菩薩峠」を書く動機として
二年前に起った大逆事件による
政治的弾圧と、つづく「冬の時代」の
到来が大きな影響を
与えたと言われている。青年時代の介山は
キリスト教から社会主義、そして
仏教へとめまぐるしい
観念的変貌をとげた。
その過程で生まれた大作「大菩薩峠」には
時代の反動化に失望し、逃避せざるを得
なかった介山の仏教思想が流れている。



創造と 表現の 病理

狂気
春原千秋



〈著者略歴〉

春原 千秋 (はるはら・ちあき)

1922年10月10日横浜市に生まれる。

1941年東京府立第六中学校（現新宿高校）卒。

北海道帝国大学予科をへて1947年9月北海道帝国大学医学部卒業。

東京逓信病院でインターン修了後東京大学医学部精神医学教室に入り内村祐之教授の指導を受ける。

同大学助手、順天堂大学医学部講師をへて、1959年より中央鉄道病院精神神経科主任医長となり現在に至る。医学博士。

日本病跡学会理事、日本精神神経学会理事、日本精神衛生会常務理事。

著書：編著『職場の精神衛生』医学書院 1971

共著『精神医学からみた作家と作品』牧野出版 1978

『精神医学からみた現代作家』毎日新聞社 1979

『精神科医からみた西欧作家』毎日新聞社 1979

その他

創造と表現の病理—文学における狂気— 定価 1400円

昭和56年12月20日 第1刷

著者 春原千秋

発行者 牧野和春

発行所 ㈱牧野出版

東京都千代田区飯田橋4-6-1

〒102 電話 03 (261) 0768

振替 東京 2—103079

©1981. by. C, Haruhara.

3095-8105-7947

目次

久保 栄	五
島村抱月	三四
松井須磨子	四四
近松秋江	六〇
葛西善蔵	七〇
倉田百三	八二
火野葦平	九二
原 民喜	一〇三

徳富蘆花と『新春』・『富士』 一一四

激情の作家・有島武郎の悲劇 一四二

夏目漱石 一七〇

太宰 治 一八〇

林 芙美子 一九二

中里介山 二〇三

天才と躁うつ病 二一四

近代日本の作家たち 二三〇

あとがき 二四八

創造と表現の病理

——文学における狂気——

久保 栄

作家の型と病蹟学

病蹟学（病跡学）または病誌学が、芸文の世界の人々の創造的な活動と、異常なその作家または芸術家の心性との相互関係を明らかにするものであるとするならば、この領域における学問的な業績の成立の可能性は、一にかかつてその作者の精神生活の異常な心性と、その創作にかかる作品についての十分な知識と領解とを前提とすることはいうまでもない。

その作品のなかに自己を吐露してやまない作家や芸術家に対しては、たとえば作家の夏目漱石や太宰治などに対するときのように、その探究は比較的たやすく展開を許されるであろう。しかしこれに対して、その作品のなかに自己を生々しく露呈することをあくまで拒む作家や、一定の創作的な立場に立ちつつ、その理論的な要請にもとづいて客観的な記述をすることを企図するもの、たとえば森鷗外や久保栄のごとき人々においては、その探究はいちじるしく困難であると感ぜざるをえない。

しかしながら、あるときには自己暴露的な、伊藤整の言葉を借りるならば自己破滅型の作家たち、すなわち自己とその周囲との人間関係を破壊するような自己告白にまで強いられるような作風を選ばざるをえない人々と、森鷗外のごとき考証風の客観主義的な、あるいは現実構成的な作風を選ばざるをえない人々、久保栄のごときプロレタリア・リアリズムを強調し、リアリズムの手法に固執する人々について、なにがかれらをしてそのような作風をとらしめるにいたったかという点について、紙背に徹する鋭い眼光をもって見ぬことができるとすれば、そこにはまた、おのずからある種の可能性の一般的な成立とその吟味とがわれわれの課題となりうるであろう。

さらには、また、その文体論において、その取材において、その創作活動の様態について、その性格の特徴あるいは異常な性格的傾向とにおそらくは存するであろう関連性についての研究もまた大きい意味をもつであろうが、それらは、ここではわれわれの病誌学的な関心からはしばらく遠ざかるものとしなければならないであろう。

筆者のひとりのかつて、自己告白型あるいは自己破滅型の作家と評された太宰治について、その創作がひとりの自己不確実性と顕示欲性との特徴を示す精神病質人格の悩みと深く関連し、創作はかれの *Pseudologia Phantastica* の傾向のために、本人にとっては異常な現実感をおびた空想と虚構のなかにあって、つねに遺書としての性格をもつ特異のものであり、遺書と

しての創作を書くことによって、かろうじて現実から逃避しながらも生きていたこと、また夏目漱石の世界はおそらくは偏執性抑うつ型の性格の人にもみられる世界であることを論じたことがある（懸田克躬）。しかし、森鷗外や久保栄らについては、これまでわれわれは、この種のものとして、多くのものを期待することができなかったというのが妥当であろうと思う。

われわれはこのたび作家としての久保栄と演出家としてのかれとの問題についての関心を中核としながら、多少の病蹟学的な探究をこころみたので、少しく述べておきたいというのが本稿の主たる趣旨である。

久保栄の疾病と病蹟学上のわれわれの関心

久保栄は日本におけるプロレタリア文学ならびに演劇活動を、ときの政治の弾圧に抗しながら、たえまない理論闘争のうちに、その理論にもとづく作家あるいは演劇活動を展開し、一般のいわゆるインテリゲンツィアの支持——いまにして思えば底の浅い——に支えられながら、その存在を主張した時期に指導的な役割をはたしたすぐれた指導者のひとりであった。このことは、かれらが鉄の武器とも考えたマルキシズムの深い理解なしには、その作品あるいは作風を理解することは困難であるということを考えしめる。いわば、かれは政治と芸術あるいは文学との統一をめざしつつ、理論的・体系的な創作方法論あるいは演劇理論をわがものとしなが

ら、それに固く固く依存し、その実践を念じつつ独自の道を進んだ作家であり、その作品は、ある意味では自己表白でないことはもとよりのこと、ある思想、ある将来の社会の当来への寄与を願う闘争そのものの具象化としての性格をもつものであったはずである。小宮山量平はこれを評して「久保栄の作風は、自己主張をきわめて明確に刻んではいたが、けっして、自己告白的ではなかった。かれは作家が自己告白的であることを憎みさえした。リズムの本道をあゆむという矜持が自己告白的な作風を許さぬ格調をたえず久保の作品に注入していた」といつているのはよくこのことを現わしているものと思われる。たしかにかれは「自己告白となりおわった私小説的発想を創作衝動の主要内容とすることによって多作できる日本の作家たち」なかで、自己主張は自己主張として明快に批評活動にゆだね、作品活動そのものは極端に精選し、のべつたらな自己告白から隔絶するところまで主題をつき離れたうえで、その自己主張を芸術的に形象しぬくところまで、磨きに磨くことをのぞいて、かれにとつて、およそ作品——少なくともリズム芸術——の成立はありえないものであり、『これが私だ』と赤裸に投げ出すよりは、『これが日本のインテリゲンツィアの極限状況だ』という一般化への自己抑制が、創作者、演出者としての久保をとらえずにいなかった」のであり、この小宮山の批評は正しいものと思われる。

この種の作家あるいは演出家としてのかれが、神経衰弱、ノイローゼあるいは抑うつ症など

と、その罹患の年代によって疾患名を変えながら、いわゆる宿痾に悩んでいたこと、ならびにその死がこの宿痾のために自ら選んだものであることはよく知られている。このいわゆる宿痾がいかなるものであり、その創作ならびに演出活動といかに関連したかが、さきにも述べたようにわれわれのここでの課題となるのである。

久保栄の生涯と作家としての特色

1 生いたち（大学卒業まで）

久保栄は一九〇一年（明治三四年）二月二日（実生年月日は一九〇〇年十二月二十八日という）札幌市において、父兵太郎、母衣子の第四子（次男）として生まれた。当時父は煉瓦製造業を営んでおり経済的には恵まれた家庭であった。一九〇三年（明治三六年）、栄が二歳のとき、父の末弟熊蔵（慶祐）の養子となり東京に移った。養父は株式の仲買業を営んでいた。養母は娼婦あがりであつたらしく、かれの短かい自叙伝にも「もと娼婦だった養母の立て膝」といった記載がある。しかしこの養母が栄をどのように育てたかは詳らかでない。栄が五歳のとき養父はこの養母を離別し、そのため栄は一時札幌の実家にあずけられることになった。その間の事情についても上記の自叙伝に、「養家の紊乱のために、学齢とともに札幌の家へあづけらる」とあるだけでくわしいことは不明である。しかしこのことは後年のかれの人格形成のうえにも

なんらかの影響を与えたであろうと考えられる。小学校は札幌創成小学校に入学したが、養父の再婚を機会に八歳のときふたたび東京に帰り、京橋小学校の三年に転入した。小学の成績は優秀で神童といわれたほどで、そのため遊び相手もないほどであったという。この新しい養母は大垣藩江戸家老の娘で、教養もあり、栄はこの母にかなり厳格に育てられたようである。かれの自叙伝にも「母に嫌々かよわされた柔道道場の五色ガラスの格子戸」といった追想が記されている。さて一九一三年（大正二年）実父、養父の合議で、将来医者にさせるために府立一中のドイツ語級に入学した。栄はそのころから俳句や短歌を「ホトトギス」や「水がめ」に投稿したり、また小学校の同窓会の芝居に熱中したりしていた。一九一四年（大正三年）七月に始まった世界大戦のあおりをくって養父は株式仲買に失敗し、一九一五年（大正四年）八月、中学三年のかれは実家に復籍した。その後は長兄哲と本郷に下宿、一九一八年（大正七年）第一高等学校第三部に入学した。寮の同室に村山知義がおり、カントやショーペンハウエルを耽読しておりその影響を受けたという。そのころから、かれの宿病となった最初の「神経衰弱」が始まった。また、さまざまな精神的彷徨の末二年半で一高を中退、以後札幌と鎌倉で療養生活をおくった。その間は日本古典に親しんでいたという。なお在学中に牧野虎雄について洋画を学んだことがあり、また島崎藤村選の「透谷賞金」に応募し、短編小説『三人の木樵の話』は「中央文学」に掲載された。一九二三年（大正一二年）東大独文選科に入学、翌年本科の検

定をとり、一九二六年（大正一五年）に卒業した。なお大学時代の追想としては上記の伝記のなかに「専攻のドイツ文学のほかに、ルネサンス美術、仏身論、院本研究に専念した僕。かわら封建的残照のつよい市井の環境に生ひ育った名残りとして、その一面ファミリイというものに對する無目的な反抗から、惑溺的な生活に青春をスポイルした」といった記載が見られる。

2 築地小劇場入団以後終戦まで

一九二六年（大正一五年）東大を卒業後、ただちに築地小劇場に入り、土方與志の文芸助手、演出助手をつとめた。一九二八年（昭和三年）、養父の出入りしていた日本橋の鳥料理屋「きん喜」のひとり娘宮田金子と結婚した。一九二九年（昭和四年）暮小山内薫の死により築地小劇場が分裂した後は、土方與志らと「新築地劇団」を結成し、文芸部を受けもったが、土方らと意見が合わず退団し、「劇場街」に拠った。

処女作『新説国姓爺合戦』（六幕）は一九三〇年（昭和五年）一月「劇場街」にのり、三月「新築地劇団」によって上演された。ついでその年の四月「日本プロリタリア演劇同盟」（プロット）に加わり、東京左翼劇場文芸部に属し、一方、「プロレタリア演劇」の編集にあたった。一九三一年（昭和六年）には『漁民』を、一九三二年（昭和七年）には『中国湖南省』を上演、また、合唱詩『ドニエール発電所』を演出した。一九三三年（昭和八年）にプロット常任中央委員となった。その一月「機関車」を演出、六月『五稜郭血書』（五幕六場）を千田

是也と共同で演出した。また一二月には前進座を小劇場に迎え『吉野の盗賊』（八場）を演出した。しかし、一九三四年（昭和九年）七月プロットと東京左翼劇場が解散を余儀なくされ、村山知義、杉本良吉、久板栄二郎らとともに「新協劇団」の結成に参加し、文芸演出部に属し、島崎藤村の「夜明け前」（第一部）を演出した。一九三五年（昭和一〇年）には中野重治、森山啓、村山知義らとリアリズム論争を行なった。「迷えるリアリズム」、「社会主義リアリズムと革命的リアリズム」、「リアリズムの一般的表象」などの論文を書いている。一九三六年（昭和十一年）「夜明け前」（第二部）を演出し絶賛を博した。なおこの年ゲーテの「ファウスト」（第一部）、ハイエルマンの「天佑丸」、シラーの「群盗」らを自訳によって演出している。この年の暮ころには妻金子と別れ、吉田隆子との共同生活にはいった。一九三七〇年（昭和一二〇三年）にはかれの代表作『火山灰地』（第一部）（第二部）を発表、演出した。この作品は日華事変後の思想的弾圧の厳しい時代のなかで書きあげられたもので、北海道十勝の火山灰地に働く農民と科学者の姿を交錯させながら、北海道の農村における農業技術の発展と、その正しい発展を企める生産機構との葛藤を描き、そのまれにみるテーマの強さ、スケールの巨大、構成の緻密、表現の洗練、ファシズムに対する抵抗精神など当時のインテリゲンツィアに強い感銘を与え、プロレタリア文学最高の傑作と評価された。戦局の進展につれて「新協劇団」と「新築地劇団」などの演劇運動の指導目標が、社会主義思想を基調とする

の故をもって一九四〇年（昭和十五年）八月に解散を命じられ、かれも検挙され、翌一九四一年（昭和十六年）二月保釈出所した。その後は素志を曲げたペンをとることを拒み書齋にこもり小山内薫の評伝の筆をとるほか、『林檎園日記』（四幕）の製作や「ファウスト」の翻訳をしながら終戦を迎えた。

3 終戦後自殺にいたるまで

久保栄は一九四五年（昭和二十年）十一月、瀧沢修、薄田研二らと東京芸術劇場をおこし、翌一九四六年（昭和二十一年）一月、民主主義文学の拠点たる「新日本文学会」常任中央委員となったが、宮本百合子らと意見が合わず七月辞任した。一九四七年（昭和二十二年）評伝『小山内薫』『林檎園日記』（四幕）を発表した。一九四八年（昭和二十三年）には俳優座に招かれ『火山灰地』（第一部）の演出にあたったが、その後は一九四七年（昭和二十二年）ごろから始まった第三回目の「神経衰弱」に悩まされつつも『のぼり窯』の執筆にあたり、一九五一年（昭和二十六年）その第一部を雑誌「新潮」に発表した。一九五二年（昭和二十七年）民芸の特別劇団員となり、翌一九五三年（昭和二十八年）五月『日本の気象』（五幕）を書き、その演出をしたが、その年ごろから「神経衰弱」は増悪し、その後は死にいたるまで五年余にわたり活発な創作活動はなく、一九五六年（昭和三十一年）三月、長時間ドラマとして『博徒ざむらい』を執筆、演出したのみである。

一九五四年（昭和二十九年）からは前後六回の入院をくりかえし、その間、一九五六年（昭和三十一年）三月一日には十数年来病床にあった妻隆子が死亡。かれ自身はその二年後の一九五八年（昭和三十三年）三月一日、順天堂医院において自殺した。享年五七歳であった。

4 作家としての特色

かれは比較的寡作ではあるが、『火山灰地』を初めとする長編戯曲八篇、シナリオ、翻案戯曲、小形式脚本など十数篇、長編小説『のぼり窯』一篇、評伝『小山内薫』、翻訳は「ファウスト」、「群盗」、「織匠」、「漁船天佑丸」を初め長短二六篇、さらに一〇〇以上の評論、エッセイおよび日記、書簡などがあり、全集一二冊にまとめられている。また、このほか数多くの演出の仕事を行った。

かれの作家としての特色は、政治と芸術との高度の統一をめざしつつ、体系的な創作方法論を自ら実践した数少ない作家のひとりであるということである。したがってかれに対する文学的研究は、プロレタリア文学、ひいてはマルクス主義芸術理論の発展にとって、たいせつなテーマを提供するものとして、こんにちもなおプロレタリア文学、プロレタリア演劇の領域において高い評価をもちつづけており、現代日本文学のうえにおいても、孤高、特異な位置を占める芸術家である。